

三作家に就ての感想

南部修太郎

青空文庫

一、有島武郎氏

私は有島武郎さんの作品を讀んで、作品のうちに滲じんでゐる作者の心の世界せかいといふものゝ大ききや、強さといふものを深く感じます。そして、線の非常ひじやうに太い、高らかなリズムをもつてゐるやうな表へうげん現り力が鋭く心に迫つて來るやうな氣きがします。そして、如何にも作者が熱情的ねつじやうてきで、直情徑行ちよくじやうけいかうてき的てきな人であるやうな氣持がしますけれども、最すう一歩進めて、作品さくひんの底そこを味つてゐると、寧ろ作者さくしやの理智りちといふものがその裡うちに一層強く働はたらいて居るやうな氣がします。即ち或作品さくひんでは、例へば、「石いしに

氏うぢのその作品さくひん竝ならびに作者さくしやの心こゝろの世界せかいに對して共鳴きやうめいも有もち、その眞摯しんしな作風さくふうに對して頭あたまを下げてゐる者ものですが、時に人ひとが、有ある島氏しまうぢは偽善者ぎぜんしやではないか、非常にその創作さうさく的態度たいどに於て、進ア撃グレイシヴ的イヴで、意志いしの強さつようなところがあり乍ら、どつか臆おくびやう病やうなところがあるではないかといつたやうな言葉ことばを聞かされた事があります。これは無論むろん作者さくしやに對する一種しゆの僻見へきけんかも知れませんが、事實じじつに於ては、私も氏の作品さくひんに強く心を惹ひかれ乍らも、どこかにまだ心こゝろ持もちにびつたり來ない點てんがないではありません。その隙間すきまは氏が熱情ねつじやう的てきな理想家りさうかのやうに見え乍ら、その底そこに於ては理智りぢが働はたらき過ぎるといふ結果けつこわから、周圍しうゐに對してどうしても左顧右眄さこうべんせずには居られないといふところがあるかも知れま

せん。従つてその思想や人生觀の凡てを愛を以て裏づけて行かうとする氏の作家としての今後は、どんな轉換を見させて行くかも知れませんが、その理智の人としての弱點から醸されて來る何物かは、可成り氏の行手にいろ／＼な曲折を出すだらうと思はれます。

二、里見弴氏

里見弴さんの作品を讀んで、一番感心するのは、その心理解剖の手腕です。批評家がそれを巧すぎると云つた爲めに、氏は巧すぎるといふ事が何故いけないのだと云つたやうな駁論

を書いて居られましたが、確かに巧すぎるといふ事だけは否定し
 來ないと思ひます。何故ならば、氏の心理解剖は何處までも心
 理解剖で、人間の心持を丁度鋭い銀の解剖刀で切開いて行く
 やうに、緻密ちみつに描ゑがいて行かれます。そして、讀よんでみると、その
 冴さえた力に驚おどろき、亦引摺ひきずられても行きませんが、さて頁を伏せて見
 て、ひよいと今作者さくしやに依つて描ゑがかれた人物の心理しんりを考へて見る
 と、人物の心理の線せんや筋丈すぢだきは極きはめて鮮あざやかに、巧みに表現されて
 居ますが、それを包む肝腎かんじんの人間の心持こころもちの色ニユアンス、合あや、味
 ひが缺かけて居ます。必然ひつぜんにどうしてもその心理の動き方が、讀よ
 む者の心持こころもちにしつくり箆はまつて來ないといふ氣きがします。これ
 を言ひ換かへれば、氏の心理描寫しんりべうしやは心理解剖しんりかいぼうであつて、心理しんりべ

描寫うしやではないのでありますまいか。兎に角今の多數の作家の中
で、頭の鋭すさといふ點では、恐らく里見弴氏は第一人者といふべ
きでせう。そして、その文ぶん章しやうも如何にもすすきりと垢脱あかぬけが
して居て、讀んで居ては、實に氣持きもちの好いいものですが、特に氏とくの
長所しんりである心理描寫べうしやといふ點に就て云へば、そこに最ヒう少し人
間的なものが欲ほしいと思ひます。言ひ換へれば、氏は餘あまり巧うます
ぎて、人間の本當の心理しんりの境を越えて飛躍ひやくしすぎるのでせう。

三、志賀直哉氏

作者テンペの素ペ質ラメントの尊トさといふものを最もつともよく感じるのは、志

賀直哉氏です。一體私は「留女」以來氏の作品を、今のどの作家の作品よりも好きなのですが、中でも「夜の光」の中に收められてゐる「正義派」「出來事」「范の犯罪」「清兵衛と瓢箪」特に「和解」には最も感嘆させられました。恐らく洗煉琢磨され、その表現の一々がテエマに對して少しの無駄も、少しの弛みもなく、簡潔緊張を極めてゐる點に於て、志賀氏の作品程なはありません。この頃の冗漫弛緩の筆を徒らに伸ばしたやうな、所謂勞作を見れば見る程、その一字一句も苟しない氏の創作的態度に頭が下らずには居られません。氏の人生を見る眼は直ちにその底に横はつてゐる眞髓を捉へてしまひます。そして、それを最も充實した意味の短かさを以て表現します。

そして茲にこそ氏の作家として天稟の素質の尊さがあるのでせう。恐らくこの點に就ては各人に異論のない事と思ひます。ところが「和解」丈けは、氏としては珍らしい程の長篇であり、亦、構圖や表現の點に多少の難がある爲めに、それに就ていろいろの議論を聞きました。私はよく友人の井汲や小島と、それ／＼の作家に就て度毎に議論をし合ひますが、三人の意見が、例へば前に挙げた四つの作では完全一致して居ながら「和解」に於ては全く違つてゐて、今でもまだ議論をし合ひます。私が「和解」を非常に傑れた作品だと主張するに反して、井汲や小島は「和解」を餘り感心してゐないのです。即ち二人は、この作の表現形式や構圖の不統一な事を擧げて、作のテエマ

の效エフ果エクトが薄うすいと云いひ、私わたしは作さくの構こう圖づや形けい式しきに對たいする缺けつ點てん
 を蔽おほふ丈だけけに、作さくの容ようが深ふかい爲ために、この作さくの有もつ尊たふさを主しゆ
 張やうして止とまなかつたのです。こゝらにも各おの人が作さくの價か値ちを批ひ判はん
 する心こころ持もちの相さう違ゐがあると思おもへますが、「和わ解かい」に描えがかれてゐる作
 のテエマ、即すなはち父ちちと子この痛いたましい心こころの爭さう鬪とうに對たいして働はたらいてゐる
 作さく者の實じつ感かん、主しゅ人公こうの心こころの苦く悶もんに對たいする作さく者の感かん情じやう輸ゆ入にゅうの
 深ふかさは、張はり切きつた弦ゆづるのやうに緊きん張ちやうした表へう現げんと相あ俟まちつて、
 作さくの缺けつ點てんを感かんじる前まへに、それそれに對たいして感かん嘆たんしてしましまひます。
 その父ちちと子この心こころと心こころとが歎なげ歎なげの中なかにぴつたり抱かかき合あふ瞬しゆん間かんの
 作さく者の筆しやには、恐おそろしい程ほど眞しん實じつな愛あいの發はつ露ろを鋭すまく描えがき出だして
 ゐるではありませませんか。かうなつて來きると、一いっ體たい私わたしは内ない容ようの方かた

に心を惹か^ひれるものですが、とても形式方面の缺點^{けつてん}や非難^{ひなん}を顧^{かへり}みる暇^{あひだ}はありません。その描^{あが}かれてゐる事に對して、作の大きな尊^{たふと}さを感じて了^{かん}ふのです。無論^{むろん}作品^{さくひん}といふものに、表現^{へうげん}形式^{けいしき}の完^{くわん}全^{ぜん}といふ事は必要^{ひつえう}な事ですが、表現^{いかん}の如何^{いかん}を問はず、作者^{さくしや}がかういふ意味^{いみ}に眞實^{しんじつ}を捉へて、それを適確^{てきかく}に現はし得てゐるとすれば、そこに最^{ふか}う深い作の意味^{いみ}があるのでありますまいか。私は又氏の「流行感^{△△△△△}冒[△]と石[△]」といふ作品^{さくひん}を讀んで、氏が日^{にち}常^{じやう}生^{せい}活^{くわつ}の出來事から、如何^{いか}に深く人生の眞實^{しんじつ}を捉へ得てゐるかといふ事を、しみ／＼感じずには居られませんでした。

青空文庫情報

底本：「文章倶楽部」新潮社

1920（大正9）年3月1日発行

入力：小林 徹

校正：鈴木厚司

2007年11月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

三作家に就ての感想

南部修太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>